薄雲巻の「みぎはの氷」

――その解釈と機能について――

林　欣慧

一　問題の所在

『源氏物語』において、「みぎはの氷」という言葉が見られ、合計五例数えられる。一例目は、薄雲巻にある。（傍線、傍点、筆者。以下同じ。）

①うち泣きつつ過ぐすほどに、十二月にもなりぬ。雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまざまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見ゐたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でるなどもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、ながめゐたる様体、頭つき、後手など、限りなき人と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。（薄雲・四三一―四三二）

幼いわが子を二条院に渡す時が迫るにつれ、益々物思いに耽る明石の君を描く場面である。降り止まない雪にも催され、感情を抑えきれず、明石の君はいつになく端近まで出て、「みぎはの氷」などを眺める。この「みぎはの氷」について、古注では特に取上げておらず、現代の注釈書においても「岸近い氷」（源氏物語評釈）と訳すに留まっていたが、

庭の池の水際に張りつめた氷（新潮日本古典集成）

庭の池の水際の氷（新日本古典文学大系）

庭の池の水ぎわに張っている氷。このあたり厳冬の自然の風景が、明石の君の沈鬱な心内を象徴的に表現（新編日本古典文学全集）

のように、近時の注釈書に至っては、「みぎは」を更に「庭の池の水際」と特定している。一方、他の四例はどのように解釈されているだろうか。二例目は、椎本巻にある。

②年かはりぬれば、空のけしきうららかなるに、汀の氷とけたるを、ありがたくもとながめたまふ。聖の坊より、「雪消えに摘みてはべるなり」とて、沢の芹、蕨など奉りたり。斎の御台にまゐれる、「所につけては、かかる草木のけしきに従ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など、人々の言ふを、何のをかしきならむと聞きたまふ。（椎本・二一二―二一三）

年が明けたにもかかわらず、依然として父八の宮を亡くした

悲しみから抜け出せない大君と中君を描く場面である。二人は、「みぎはの氷」が溶けた光景によって、今まで生きながらえたことの不思議さを意識させられる。山寺の聖から芹や蕨をもらっても、二人は初春の到来を実感できない。三例目は、総角巻にある。

③雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじきことに言ふなる十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを、簾捲き上げて見たまへば、向かひの寺の鐘の声、枕をそばだてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば

風のいとはげしければ、蔀おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくと磨くも、えかうはあらぬはやとおぼゆ。わづかに生き出でてものしたまはましかば、もろともに聞こえましと思ひつづくるぞ、胸よりあまる心地する。（総角・三三二―三三三）

大君が亡くなった後、宇治に逗留する薫が景色を眺め、故人を偲ぶ場面である。十二月のある夜、四方の山を映す鏡のように見える「みぎはの氷」は、月光に映えて美しい。もし大君がまだ存命であれば、共に語ることもできたものをと、薫は胸が裂けるような心地になる。四例目は、浮舟巻にある。

④明けはてぬさきにと、人々しはぶきおどろかしきこゆ。妻戸にもろともに率ておはして、え出でやりたまはず。

世に知らずまどふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつつ

女も、限りなくあはれと思ひけり。

涙をもほどなき袖にせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ

風の音もいと荒ましく霜深き暁に、おのがきぬぎぬも冷やかになりたる心地して、御馬に乗りたまふほど、引き返すやうにあさましけれど、御供の人々、いと戯れにくしと思ひて、ただ急がしに急がし出づれば、我にもあらで出でたまひぬ。この五位二人なむ、御馬の口にはさぶらひける。さかしき山越えはててぞ、おのおの馬には乗る。水際の氷を踏みならす馬の足音さへ、心細くもの悲し。（浮舟・一三五―一三六）

浮舟と初めて契りを結んだ後、匂宮が従者とともに馬で帰京する場面で、一行の乗る馬が「みぎはの氷」を踏みならす足音を聞き、匂宮が心細く感じる描写が見られる。この描写を踏まえ、浮舟と再び逢瀬を果たした後、匂宮は次のように、景色を眺め、歌を詠んでいる。

⑤雪の降り積もれるに、かのわが住む方を見やりたまへれば、霞のたえだえに梢ばかり見ゆ。山は鏡をかけたるやうにきらきらと夕日に輝きたるに、昨夜分け来し道のわりなさなど、あはれ多うそへて語りたまふ。

「峰の雪みぎはの氷踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。（浮舟・一五四）

以上②から⑤の四例については、薄雲巻の例を「庭の池の水

際」と特定した三冊は、「みぎは」に宛てる字に差こそあれ、「みぎはの氷」のままにしたり、「岸辺の氷」と訳すに留まったりして、場所に関する明確な注記を省いている。これに対して、総角巻の例を「川水の氷」（源氏物語評釈）と、浮舟巻の二例目を「川辺の氷」（日本古典文学大系）と明記するものも見られる(一)。

ここで以下の疑問が生じる。「みぎはの氷」とは果たして何だろうか。平安時代において、「池の氷」が観賞の対象であり、文学作品にも多く見られることは言うまでもないが、「みぎはの氷」とはどのように使い分けられているのか。小稿は、この二点を解明することを目的とする。また、この二点について考察することによって、浮き彫りとなった問題点も明らかにしたい。

二　「みぎは」の解釈

第二章では、『源氏物語』における「みぎはの氷」を解釈する手がかりとして、まずそれ以前の当該用語の用例を確認する。また、「みぎは」という言葉は、『倭名類聚抄』(二)で、

唐韻云、汀、他丁反、和名美岐波、水際平沙也。

と説明されているだけで、「庭の池の水際」とも、「川辺」とも特定されていないため、第一章で挙げた五例のように、「みぎは」の所在を明示する言葉がない場合は、解釈が躊躇われる。この問題を解決するために、それ以前の「みぎはの氷」の用例における「みぎは」の使用状況を参照しつつ、『源氏物語』の中で、「みぎは」がどのように解釈できるかをも検討したい。

二―一　『源氏物語』以前の「みぎはの氷」

『源氏物語』の成立については諸説がある。その影響を深く受けた作品に、『夜の寝覚』が挙げられる。ここでは『夜の寝覚』が成立したとされる後冷泉朝までを、『源氏物語』の成立年の下限とし、それ以前の「みぎはの氷」の用例を散文作品と和歌に求める。すると、次の一例しか見出せない。

かはづらにうすめどりといふとりのなき侍りしかば
かものゐるみぎはのこほりしむるまままきぬうすめどりあまたたびなく　（『山田法師集』10）

『後撰集』に入集している山田法師(三)という歌人の家集中の一首である。詞書の「かはづら」から、この「みぎはの氷」は、川のそれと推定できるが、一例だけでは、「みぎはの氷」という景物の解釈を判断するには不十分である。そのため、散文作品に「みぎは」と「氷」を一文に含む情景描写を求めたが、見出せなかった。しかし、和歌においては『山田法師集』の一例を含め、合計十首確認できる。時代順に並べると次のようになる。

冬こほりしたるいけ
こほりゐるいけのみぎはは水づとりのはかぜになみもさわがざりけり　（『中務集』43）

山田法師と同じく『後撰集』に入集している、中務の家集『中務集』中の一首である。詞書に「こほりしたるいけ」とある。

その上、和歌本文では、「みぎは」ははっきりと「いけの」それと明記されている。次の一首は『拾遺集』に初入集した、特異な表現で知られる曾禰好忠の歌集にある。

中

こほりする洲崎のみぎはほど遠み寄りこし波も沖におりつゝ

（『好忠集』353）

『好忠集』中の「毎月抄」に当たる部分の「十二月」の「中」に属する一首である。この「みぎは」は洲崎のそれであると明記されており、「ほど遠み」「沖」なども踏まえて、その具体的な位置は川、もしくは海にあると考えられる。次の一例も『好忠集』に見られる。

冬十

高瀬さす淀のみぎはのうは氷下にぞなげく常ならぬ世を

（『好忠集』408）

この「みぎは」は「高瀬」と「淀」から、川のそれを指していると判断できよう。次の一首は、選子斎院における唱和を収録した『大斎院前の御集』にある。

初春の風に氷もとけぬらし汀に波の今や寄すらむ

（『大斎院前の御集』延正47）

その前に場所を特定する語彙が付けられておらず、「みぎは」が単独で使用される一首である。判断に悩む所であるが、「いまやよすらむ」という言い方から、この「みぎは」は目前に見えない川、もしくは湖のそれと考えられる。但し、当該歌を訳すと、「初春の風に氷も溶けたようだ。汀に波が今ごろ寄せているのだろうか」となり、この氷がどこにあるかは確定できないため、当該歌を「みぎは」の氷を詠じた用例として数えることはできない。次の一首は『和漢朗詠集』にある。

山川のみぎはまされり春かぜに谷の氷は今日や解くらむ

（『和漢朗詠集』390）

「みぎは」ではなく、「たに」の氷を詠じたものと判断する。次の一首は『相模集』にある。長元八年（一〇三五）以降を活躍期とする相模であるが、当該歌は寛弘六年（一〇〇九）以前のものと考えられる(四)。

冬

涙川みぎはにこほるうは氷したにかよひて過ぐすころかな

（『相模集』560）

当該歌の「みぎは」に関しては、「なみだがは」は抽象的であるが、実景に照らし合わせると、川のそれが思い浮かぶだろう。「みぎは」の氷という景物を取り上げる例が少ない中で、「みぎはのうはごほり」と叙述する点、「うはごほり」までの部分を「下に」を導く序詞とする点、および一首の最後に「下に」秘められている感情を詠む点から、当該歌は『好忠集』408番歌の構造とほぼ完全に一致しており、好忠詠から相模詠への影響は認めてよかろう。また、次の一首も好忠の影響が認められる。

雑十三首

ぬまみづのみぎはほとりのうすごほりとくるたよりにかげもみしがな

（『千穎集』96）

この「みぎは」は「ぬまみづ」のそれと明記されている。「別田千穎」は虚構の人物名である。歌集の具体的成立時期と作者の正体は不明であるが、詠歌表現において好忠から多大な影響

を受け、その稀語を好んで受容する傾向があると指摘されている[五]。また、前後に配列されている歌の表現から[六]、当該歌における「みぎは」の氷に関する描写は、やはり好忠の影響によるものと考えるべきであろう。

次は更に時代が下がり、相模から「若き人」と称された[七]藤原経衡の一首である。

水のほとりの残りの雪
いかにして残れる春の雪ならむ氷解けにし池の汀を
（『経衡集』80）

中務の歌と同様、「いけのみぎは」と明記されている。

題不知
さよふくるままにみぎはやこほるらんとほざかりゆくしがのうらなみ
（『後拾遺和歌集』快覚法師419巻六・冬）

右の一首は、後冷泉朝以前の作と断定することができないが、作者の快覚法師は治安二年（一〇二二）に誕生したため、寛徳二年（一〇四五）の時点では二十三歳であり、歌を詠むのに充分な年齢であることを考えて、挙げることにした。「みぎは」の前にその場所を明示する言葉は付けられていないが、末尾の「しがのうらなみ」から、この「みぎは」は湖のそれと推定できる。

十例中、文脈上「みぎは」の氷の用例として採取できないと判断した『大斎院前の御集』と『和漢朗詠集』の二首を差し引くと、「みぎは」の氷という景物を取り上げた用例は八例しか見られない。また、相模と千穎の二首は好忠の影響によるものと考えられる。更に、八例がいずれも私家集にある。以上三点から、後冷泉朝初年の寛徳二年（一〇四五）以前、「みぎは」の氷は詠じられやすい景物ではないと考えられる。しかし、この八例から、「みぎは」の使用について次の傾向が見て取れる。

まず、川もしくは湖のそれとして描かれるものが比較的多く、六例を占める。また、池のそれを指す『中務集』と『経衡集』の二例とも、その前に「池の」を付けられていることにも注目すべきである。この結果を踏まえて、次節では、『源氏物語』中の「みぎは」について考察したい。

二―二　『源氏物語』における「みぎは」

『源氏物語』の中で、「みぎはの氷」の五例を含め、「みぎは」は合計十四例ある。第一章で挙げた五例のうち、浮舟巻の二例は、「馬」を手がかりに、川、もしくは湖のそれと推定できる。その上、椎本巻には次の場面が見られる。

雪ふかき山のかけ橋君ならでまたふみかよふあとを見ぬかな

と書きて、さし出でたまへれば、「御ものあらがひこそ、なかなか心おかれはべりぬべけれ」とて、

「つららとぢ駒ふみしだく山川をしるべしがてらまづやわたらむ

さらばしも、影さへ見ゆるしるしも、浅うはべらじ」と聞こえたまへば、思はずに、ものしうなりて…（椎本・二〇九―二一〇）

年の瀬、薫は大雪を冒して、八の宮亡き後の宇治邸を訪れる。この薫の厚情に感じて、大君はそれまでより柔らかく接し、「雪

ふかき」の歌を詠んだ。これに対して、薫はすかさず「つららとぢ」の歌を詠み、思いを告げる。この歌の情景と合わせて考えると、浮舟巻の二例の、馬が踏み鳴らした「みぎはの氷」も、山川のそれである可能性が高い。一方、浮舟巻の二例以外の三例の解釈は、未だに確定できていない。

この三例の解釈を明らかにするために、そして、浮舟巻の二例の解釈をより確たるものにするために、以下では、『源氏物語』の「みぎは」の全十四例のうち、第一章のこの五例を除いた九例について調査したい。一例目は、須磨に到着した後、源氏が藤壺に、自分が涙ながらに手紙を書いたことを愁訴する場面にある。

京へ人出だしたてたまふ。二条院へ奉れたまふと、入道の宮のとは、書きもやりたまはず、くらされたまへり。宮には、

「松島のあまの苫屋もいかならむ須磨の浦人しほたるるころ

いつとはべらぬ中にも、来し方行く先かきくらし、汀まさりてなん」。（須磨・一八八―一八九）

その前に場所を特定する言葉がなく、「みぎは」が単独で使用される一例であるが、『源氏釈』をはじめ、諸注において、

兼輔の兵衛佐、賀茂川のほとりにて、左衛門の督人三春有輔甲斐へ行く、むまのはなむけによめる

君惜しむ涙落ちそふこの川のみぎはまさりてながるべらなり

（『貫之集』第七710）

を踏まえた表現と指摘されており（八）、川、もしくはここでは場所に応じて、海のそれを意識したものと考えられる。次の一例は明石巻にある。雨風が続く中、都からの紫の上の手紙を読み、源氏が益々涙を禁じえない場面である。

二条院よりぞ、あながちに、あやしき姿にてそぼち参れる。…御文に、「あさましく小止みなきころのけしきに、いとど空さへ閉づる心地して、ながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし波間なきころ」

あはれに悲しきことども書き集めたまへり。ひき開くるより、いとど汀まさりぬべく、かきくらす心地したまふ。（明石・二二四）

須磨巻の用例と同じ方法で使用されている。次の一例は、夏の町にある馬場の催しが終了した後、泊まりに来た源氏に対して、花散里が詠歌する場面に見られる。

年ごろかくをりふしにつけたる御遊びどもを、人づてに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思したる。

その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめ今日やひきつる

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。（蛍・二〇八―二〇九）

「みぎは」の前には、やはり場所を特定する言葉がない。しかし、馬が食む草が生えてある場所ということを手がかりに、「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（『古今和歌集』読み人知らず892巻十七・雑上）を踏まえて考えると、この「みぎは」は深山にある川、もしくは湖のそれを意識した

ものと判断してよかろう。次の一例は梅枝巻で、源氏が惟光の息子に、自らが合わせた香を取り出させる場面である。

かのわが御二種のは、今ぞ取り出させたまふ。右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる、汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉掘りてまゐれり。（梅枝・四〇八）

その前に場所を明示する言葉はないが、西の渡殿の下をその流れが潜るという描写から、この「みぎは」は遣水のそれを指すものと判断できる。次の一例は、大君の参院が決まる直前の、玉鬘家の姉妹の悠然たる日常を描く場面である。

この御方の大輔の君、

心ありて池のみぎはに落つる花あわとなりてもわが方に寄れ

勝方の童べ下りて、花の下に歩きて、散りたるをいと多く拾ひて持て参れり。（竹河・八一）

左右に分けて、庭先の桜を賭け物にした大君との碁の勝負に、右方の中君が勝利した。その中君づきの大輔も意気揚々と、たとえ「池のみぎは」に落ち、泡になったとしても、桜花はわが主の方に寄れ、と歌を詠む。「みぎは」に「右」が掛けられている。次の一例は、初瀬詣での帰途、夕霧の宇治の別邸に中宿りをした匂宮を、薫をはじめとする貴公子たちが迎えに上がる場面にある。

宰相は、かかるたよりを過ぐさずかの宮に参でばやと思せど、あまたの人目を避きて独り漕ぎ出でたまはん舟渡りのほども軽らかにやと思ひやすらひたまふほどに、かれより御文あり。

山風にかすみ吹きとく声はあれどへだてて見ゆるをちの白波

草にいとをかしう書きたまへり。宮、思すあたりと見たまへば、いとをかしう思いて、「この御返りは我せん」とて、

をちこちの汀に波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の川風

中将は参でたまふ。（椎本・一七二―一七三）

宇治にある八の宮の邸宅近辺まで来ているにもかかわらず、人目を憚り、訪問に踏み切れない薫が歯痒い思いをしているところに、八の宮から、一首の歌が寄せられる。これに匂宮が嬉々と返歌をする。その歌中の「みぎは」の前に、場所を特定する言葉はないが、文脈から、宇治川のそれを指すものと理解してよかろう。次の一例は、第一章で挙げた椎本巻の当該場面に続く、大君と中君が詠む歌に見られる。

君がをる峰の蕨と見ましかば知られやせまし春のしるしも

雪ふかき汀の小芹誰がために摘みかはやさん親なしにして

など、はかなきことどもをうち語らひつつ、明け暮らしたまふ。（椎本・二一三）

この「みぎは」の前には、やはり場所を特定する言葉が付けられていないが、右の大君と中君の歌が、山寺の聖から、「雪消えに摘みてはべるなり」と、「沢の芹、蕨など」を贈られたことを踏まえて詠んだものという点から、深山の川、もしくは湖のそれを意識した表現と考えられる。次の一例は、総角巻にある。自分の夢に現われ、往生できない苦しみを訴える八の宮

のために、その法の師であった山寺の聖は、常不軽を念誦する僧侶を遣わすが、その僧侶の一行が八の宮邸に戻る場面で、中君と薫は次のように描写されている。

中の宮、切におぼつかなくて、奥の方なる几帳の背後に寄りたまへるけはひを聞きたまひて、あざやかにゐなほりたまひて、「不軽の声はいかが聞かせたまひつらむ。重々しき道には行はぬことなれど、尊くこそはべりけれ」とて、

霜さゆる汀の千鳥うちわびてなく音かなしき朝ぼらけかな

言葉のやうに聞こえたまふ。（総角・三二一―三二二）

不安に感じる中君に対して、薫は念誦の声を千鳥の鳴き声に譬え、歌を詠む。この「みぎは」の前にも、その所在を特定する言葉がないが、千鳥が川辺、もしくは海辺に生息する生物であることから、それを意識したものと考えられる。最後の一例は第一章で挙げた匂宮の歌に続く浮舟の手習に見られる。

あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ。

降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

と書き消ちたり。この「中空」をとがめたまふ。げに、憎くも書きてけるかなと、恥づかしくてひき破りつ。（浮舟・一五四）

本節で挙げた用例の大半がそうであるように、この「みぎは」についても、その所在を特定する言葉を前に付けられていない。しかし、この「みぎは」は、匂宮の歌を踏まえたものということから、山川のそれを意識した表現と考えられる。

この九例を調査したところ、『源氏物語』の「みぎは」の使用状況を以下のように帰結できる。十四例中、その前に場所を特定する言葉を付けられずに使用されているものは十三例ある。解釈が確定できていない薄雲巻、椎本巻および総角巻の三例を除いた、残りの十例中、九例は川、もしくは湖のそれとして解釈されるべきものである。

一方、池のそれを指す例は少なく、竹河巻の大輔の君の歌という一例しか見られない。その上、当該例は「池の」を付けられている。また、『紫式部日記』においては、

五日の夜は、殿の御産養。十五日の月くもりなくおもしろきに、池のみぎは近う、かがり火どもを木の下にともしつつ、屯食ども立てわたす。（『紫式部日記』一四二）

の一節が見られる。

本章第一節で挙げた「みぎは」の氷の諸例から、「みぎは」の使用傾向を考察した。繰り返しになるが、「みぎは」が単独で使用される場合、川、もしくは湖のそれを指すことが多い。これに対し、池のそれを指す場合は、「みぎは」の前に「池の」を付けられる傾向が見て取れる。以上を踏まえて、紫式部にも同じような傾向があると考えられる。そのため、薄雲巻、椎本巻および総角巻の三例も、庭の池よりも、川、もしくは湖のそれであるである可能性が高い。但し、遣水として解釈すべき梅枝巻の一例があるため、当該用語の解釈をより明確にするためには、更なる考察が必要である。

三　大堰と宇治の自然環境

「みぎはの氷」の分布状況に着目したい。一例目が早くも第

一部の薄雲巻に見られるにもかかわらず、二例目は、椎本巻でようやく現われる。この間隔は何を意味するのか。また、第一部と第二部の合計一例に対して、宇治十帖では四例も数えられ、比較的高い頻度で使用されている。その理由は何だろうか。以上二点から、「みぎはの氷」が使用されるには、特定の条件が必要であり、それが宇治十帖でよく見られるのに対して、第一部と第二部では、薄雲巻においてのみ、その条件が満たされている、という可能性に想到する。本章では、その条件を解明することによって、「みぎはの氷」の正体を突き止めたい。

三―一　山里と川のわたり

登場人物の感情表現やその場面の情緒と関わる条件であるという可能性もあるが、宇治十帖の第一・二部に対する特色と言えば、真っ先に思い浮かぶのは、やはりその独特な自然環境であろう。八の宮の宇治移住の経緯を説明する、

かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、移ろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ。…網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせん。（橋姫・一二五―一二六）

の一節にあるように、宇治の八の宮邸は、「山里」で、「川のわたりに」あり、それが浮舟巻までの七帖の主な舞台に当たる。

『源氏物語』の中で、「山里」として位置づけられる場所は、当該用語の用例を確認したところ、宇治の八の宮邸の他にも、紫の上の北山での仮住まい、源氏の須磨での住居、嵯峨野の御堂、明石の君の大堰の邸、桂のあたり、朱雀院の西山での住居、および小野の六箇所が見られる。後者の「川のわたりに」に関しても、宇治の八の宮邸の他には、源氏が方違えした紀伊守邸、明石の君の大堰の邸、および浮舟の初瀬詣での帰途での泊まり先の三箇所が見られる。しかし、薄雲巻当該場面の舞台に当たる明石の君の大堰の邸のみが、「山里」で「川のわたり」にあり、宇治の八の宮邸とその自然環境が類似している点は注目に値する。このことから、「みぎはの氷」が使用されるか否かは、当該場面の自然環境によると考えられる。

第二章第一節で挙げた「みぎは」の氷の諸例に、自然環境を描写する言葉が多く見られる。このことを踏まえて、以下は自然環境を描写するそれらの言葉の、『源氏物語』における使用状況を確認することによって、「みぎは」の氷が使用されるに必要な条件をより明らかにしたい。

三―二　かはづら

第二章第一節で、「みぎは」の氷の初例として、『山田法師集』の10番歌が挙がっており、その詞書には、「かはづら」という自然環境を特定する言葉が見られる。このことを踏まえ、『源氏物語』における当該用語の使用状況を確認したところ、ある事実が浮き彫りとなった。

秋の末つ方、四季にあててしたまふ御念仏を、この川面は網代の波もこのごろはいとど耳かしがましく静かならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂に移ろひたまひて、七日の

ほど行ひたまふ。（橋姫・一三五）

右は橋姫巻の一節である。焼失した京の邸宅から、宇治に住まいを移した八の宮であるが、網代の音があまりに喧しく、修行に専念できないため、しばらく「かはづら」にある自宅を離れ、阿闍梨の住居に移ることにした。次の一例は、椎本巻にある。

その年、三条宮焼けて、入道の宮も六条院に移ろひたまひ、何くれともの騒がしきに紛れて、宇治のわたりを久しう訪れきこえたまはず。…その年、常よりも暑さを人わぶるに、川面涼しからむはやと思ひ出でて、にはかに参でたまへり。（椎本・二一五―二一六）

母女三の宮の遷居など、諸事繁多な日々が続き、しばらく宇治を訪れなかった薫は、例年にない暑さから、「かはづら」にある八の宮邸はさぞ涼しかろうと思い出し、ふとそこへ赴く。次の一例は、宿木巻にある。

阿闍梨召して、例の、かの御忌日の経仏のことなどのたまふ。「さて、ここに時々ものするにつけても、かひなきことの安からずおぼゆるがいと益なきを、この寝殿こぼちて、かの山寺のかたはらに堂建てむとなん思ふを、同じくはとくはじめてん」とのたまひて、…「昔の人の、ゆゑある御住まひに占め造りたまひけん所をひきこぼたん、情けなきやうなれど、その御心ざしも功徳の方には進みぬべく思しけんを、とまりたまはん人々を思しやりて、えさはおきてたまはざりけるにや。今は、兵部卿宮の北の方こそはしりたまふべければ、かの宮の御料とも言ひつべくなりにたり。されば、ここながら寺になさんことは便なかるべし。心にまかせてさもえせじ。所のさまもあまり川面近く、顕証にもあれば、なほ寝殿を失ひて、異ざまにも造りかへんの心にてなん」とのたまへば…（宿木・四五五―四五六）

薫が阿闍梨に、宇治の八の宮邸の改築を相談する場面である。その理由の一つとして、「あまりかはづら近」いということが持ち出される。

『源氏物語』において、「かはづら」は合計五例ある。他の二例は次のように使用されている。

惟光朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば遣はして、さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、さやうの住まひによしなからずはありぬべし、と思す。造らせたまふ御堂は、大覚寺の南に当たりて、滝殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これは川づらに、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のことそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。（松風・四〇一）

明石の君の大堰遷居に当たり、源氏は惟光に諸事を整えさせる。その大堰の邸は、まず源氏に返答する惟光によって、「海づら」に似通った場所として紹介された上で、それに続く地の文で、「かはづらに」あると説明されている。そして、残りの一例は、次の場面で使用されている。

冬になりゆくままに、桂の住まひいとど心細さまさりて、上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、君も、「なほかくてはえ過ぐさじ。かの近き所に思ひ立ちね」とすすめたまへど、つらきところ多く試みはてむも残りなき心地す

べきを、いかに言ひてか、などいふやうに思ひ乱れたり。

（薄雲・四二七）

薄雲巻冒頭の場面である。校訂に使用された写本の大多数が「桂」とあるからか[注]、所引の新編日本古典文学全集の当該箇所は「桂」とある。しかし、池田亀鑑編著『源氏物語大成校異篇』（中央公論社、一九五三）によって青表紙本系統の大島本と池田本、河内本系統の尾州家本と高松宮家本、および別本系統の陽明文庫と保坂本の本文異同を確認したところ、河内本系統の尾州家本と別本系統の陽明本・保坂本の当該箇所は「かはづら」となっており、単なる誤写として片付けられない。その上、前述したように、松風巻においても大堰の邸は「かはづらに」ある場所として位置づけられている。更に、左の諸本に共通して見られる、「冬」と「心ぼそ」という言葉に注目したい。

（大）冬になりゆくまゝに・・かはつらの・すまゐ・いとゝ・・心－－ほそさまさり

（池）冬になりゆくまゝに・・か・つらの・すまゐ・いとゝ・・心－－ほそさまさり

（尾）冬になりゆくまゝに・・かはつらの・すまゐはいとゝ・・心－－ほそけなるに

（高）冬になりゆくまゝに・・か・つらの・すまゐ・いとゝ・・心－－ほそさまさり

（陽）冬になりゆくまゝに・・かはつらの・すまゐ・いと・・・心－－ほそさまさり

（保）冬ふかくなるまゝにいとかはつらの・すみかは・・・もの心－－ほそけなるを

文脈上から考えても、「かつら」より、「かはづら」の方が前後と呼応しており、当該箇所に相応する表現と思われる。もっとも、右記の通り、底本として使用された大島本の当該箇所も「かはづら」として判読できる以上、ここでは「かはづら」を取り、この一節を、冬になるにつれ、「かはづら」にある住まいは益々心細く感じられる、と解釈すべきである。

『源氏物語』において、「かはづら」は五例あるが、以上のように、全て宇治の八の宮邸と、大堰の邸を舞台とする場面において確認される。言い換えれば、「かはづら」は、この両地でしか使用されないのである。この結果と、第一章の「みぎは」の使い分けに関する考察を踏まえ、以下のことが言えよう。『源氏物語』における「みぎはの氷」は、「川」の、更に、本章第一節の「山里」という条件も考慮に入れると、第二章第一節の諸例において見られる、山川のそれと判断してよかろう。

三―三　視界

薄雲巻の末尾に次の場面が見られる。

山里の人も、いかになど、…いとほしくて、例の不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。住み馴るるままに、いと心すごげなる所のさまに、いと深からざらむことにてだにあはれ添ひぬべし。…いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の蛍に見えまがふもをかし。「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」とのたまふに、

「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん

思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

「あさからぬしたの思ひをしらねばやなほ篝火の影はさわげる

誰うきもの」とおし返し恨みたまへる。（薄雲・四六五―四六六）

姫君が二条院に渡った後も寂寥な住まいに残る明石の君のことを案じ、源氏は大堰の邸を訪れる。二人は共に景色を眺める。「篝火どもの影の、遣水の蛍に見えまがふ」の一節から、大堰の邸から篝火が見られることが分かる。この篝火は、「木繁き中より」と、生い茂っている木々の隙間から眺めること、および遣水の蛍に見間違えることから、大堰の邸の敷地からやや離れた流れにあるものと推定できよう。また、「かかる住まひにしほじまざらましかば」と「いさりせし影」からも、この篝火は、須磨の海辺を想起させるものであると考えられる。更に、『岷江入楚』（私に句読点と濁点を付した。）における、

かゝり火どもの　秘　八月の末なれば、自然の篝火などもあるべし　私大井川鵜舟の篝八月までも有べき歟

の一節も考慮に入れると、この篝火は大堰川にあるものと考えられる。言い換えれば、明石の君のいる大堰の邸から大堰川が見られよう。

また、宇治にある八の宮邸に関しても、浮舟巻には、

山の方は霞隔てて、寒き洲崎に立てる鵲の姿も、所がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに、柴積み舟の所どころに行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬことどものみとり集めたる所なれば、見たまふたびごとに、なほ、その昔のことのただ今の心地して…（浮舟・一四五）

の一節がある。本章第二節で挙げた宿木巻の場面で「所のさまもあまり川面近く」という描写が見られることも考えると、宇治にある八の宮邸から宇治川を眺望できよう。そして、以上を踏まえて、第一章で挙げた薄雲巻の「みぎは」の氷は大堰川の、宇治十帖の四例は宇治川のそれと判断してよかろう。

四　「みぎは」と「池」

第三章までの考察によって、『源氏物語』における「みぎはの氷」の解釈は凡そ確定できた。しかし、考察することによって、新たな疑問が生じる。第二章第一節の最後で述べたように、「みぎは」の氷は『源氏物語』が成立した時代においては、よく取上げられる景物ではない。何故作者はこの言葉を使用したのか。本章では物語中の「池」に関する自然描写と比較することによって、この問題を解明したい。

四―一　「池の氷」

『源氏物語』の中で、「池」の氷が描写される場面として、次の四例が見られる。

㋑宮は、三条宮に渡りたまふ。…雪うち散り風はげしうて、院の内やうやう人目離れゆきてしめやかなるに、大将殿こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。御前の五葉の雪にしをれて、下葉枯れたるを見たまひて、親王、

かげ広みたのみし松や枯れにけん下葉散りゆく年の暮

かな

何ばかりのことにもあらぬに、をりからものあはれにて、大将の御袖いたう濡れぬ。池の隙なう凍れるに、

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき

と思すままに、あまり若々しうぞあるや。（賢木・九九―一〇〇）

桐壺院が亡くなるとともに、藤壺一派は失墜する。寂寥たる年末の三条の宮を目にして、院の庇護を偲ぶ歌を詠む兵部卿宮に呼応し、訪客の源氏も、鏡のように見える凍りついた池に、亡き父の姿が見られないことを嘆く。月光の下で輝く「みぎはの氷」を眺め、亡き大君を偲ぶ総角巻の場面と似通うように思われる。

㋺大将参りたまへり。あらたまるしるしもなく、宮の内のどかに人目まれにて…解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは時を忘れぬなど、さまざまながめられたまひて、「むべも心ある」と忍びやかにうち誦じたまへる、またなうなまめかし。（賢木・一三五―一三六）

新年であるにもかかわらず、院の生前と打って変わって、三条の宮には人影も疎らである。「あらたまるしるしもな」い、この惨澹たる光景にひきかえ、時節相応に溶けわたる池の氷と岸の柳を前に、源氏は感慨を禁じえない。「年かはりぬれば、空のけしきうららか」で、「みぎはの氷」が溶けているという春らしい光景を見て、それに反する自らの境遇を、大君姉妹がつくづく感じる第一章で挙げた椎本巻の例と似通う場面である。

㋩雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光りまさりて見ゆ。「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。…」…月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽のかげ心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごきに、童べおろして雪まろばしせさせたまふ。…「ひと年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。…」とのたまふ。（朝顔・四九〇―四九二）

月光に輝く雪、滞る遣水の流れと凍りついた池、そして雪まろばしをする女童。源氏が紫の上とともに眺めるそれは、二条院の庭の景色と判断してよかろう。この景色に感じて、源氏は藤壺を想起する。賢木巻の例と似た一例である。

㋥「今朝この人々の戯れかはしつる、いとうらやましく見えつるを、上には我見せたてまつらん」とて、乱れたることどもすこしうちまぜつつ、祝ひきこえたまふ。

うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなきかげぞならべる

げにめでたき御あはひどもなり。

くもりなき池の鏡によろづ世をすむべきかげぞしるく見えける

何ごとにつけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえ

かはしたまふ。今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はんに、ことわりなる日なり。（初音・一四四―一四五）

新春の六条院、源氏と紫の上が睦まじく談笑し、薄氷が解けた池の鏡に映る自分たちの姿を詠む場面である。

見る者に感慨を催させる点において、初音巻の用例のような和やかな場面も見られるが、『源氏物語』中の「池の氷」と「みぎはの氷」とは類似した役割を持つ言葉ということが分かる。

四―二　「みぎは」と「池」の境界線

宇治の八の宮邸と大堰の邸を舞台とする場面における池の用例について調べたところ、一例しか見出せない。その上、

この宇治山に、聖だちたる阿闍梨住みけり…年ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を説き聞かせたてまつり、いよいよ、この世のいとかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば、「心ばかりは蓮の上に思ひのぼり、濁りなき池にも住みぬべきを、いとかく幼き人々を見棄てんうしろめたさばかりになん、えひたみちにかたちをも変へぬ」など、隔てなく物語したまふ。（橋姫・一二七）

にあるように、それは阿闍梨の教えを受けた八の宮が、自らの道心を訴えるための仏典によった表現であり、宇治の八の宮邸周辺の景色を描写するために使用されたものではない。また、「池」の用例の分布状況に、興味深いものが窺える。

宇治に遷居する前に、八の宮邸は京にあった。その邸宅の自然描写の中で、次の場面が見られる。

さすがに広くておもしろき宮の、池、山などのけしきばかり昔に変らでいといたう荒れまさるを、つれづれとながめたまふ。（橋姫・一二〇）

荒れ果てた邸宅内の池と山を、宮がつれづれと眺める。また、近接するところに、次の場面が見られる。

春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの翼うちかはしつつおのがじし囀る声などを、常ははかなきことと見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに御琴ども教えきこえたまふ。（橋姫・一二二）

池の鴛鴦をうらやましく眺めることから、亡き妻を偲ぶ宮の心が見える。このように、京の八の宮邸を舞台とする場面では、池に関する描写が頻繁とも言えるほど見られる。にもかかわらず、宮が宇治に遷居するとともに、前述したように、その邸宅周辺の自然描写から、「池」がぴたりと姿を消したのである。

更に、本章第一節で挙げた、源氏と紫の上が共に庭の池を眺める場面は朝顔巻にある。その朝顔巻の直前にある薄雲巻の当該場面で、「みぎはの氷」という言葉が使用されたばかりということに注目したい。同じく「氷」でも、舞台が京の邸宅に移るなり、それが「みぎは」から、「池」のそれへと鮮やかに変えられ、「池」が京の邸宅に、「みぎは」は山川にある景物という作者の意識が強く感じ取れる。

本章第一節の末尾では、『源氏物語』の中で、「池の氷」と「みぎはの氷」の役割が類似していると述べた。このことを踏まえて、大堰の邸や宇治八の宮邸を舞台とする場面で「みぎはの氷」が使用されるということは、正に場面に応じて適切な景物を描こうとする作者の心がけの現れと言えよう。

五　結びに代えて

「みぎはの氷」という言葉について、注釈の混乱が見られる。小稿は当該用語の解釈を確定するために起筆したものであるが、この問題を考察することによって、「みぎは」という言葉の使用傾向や、作者が「みぎはの氷」を使用した意図も明らかになった。

「みぎはの氷」は、文脈を理解する上で取るに足らない、叙景場面の一語句にすぎないように見え、その解釈の如何は微細な問題と取られかねない。しかし、この問題に取り組むことによって、新たな発見に繋がったように、いかに小さな問題に見えようと、常にその問題に秘められている可能性を忘れるわけにはいかない。小稿は最後にこのことを提示しておきたい。

［注］

（一）『源氏物語』における「みぎはの氷」の注釈を次に示す。（『花鳥余情』の句読点と濁点は私に付した。）

①『河海抄』無し・『花鳥余情』無し・『日本古典文学大系』無し・玉上『評釈』（注）無し（訳）岸近い氷・『新潮日本古典集成』庭の池の水際に張りつめた氷・『新日本古典文学大系』庭の池の水際の氷・『新編日本古典文学全集』（注）庭の池の水ぎわに張っている氷。このあたり厳冬の自然の風景が、明石の君の沈鬱な心内を象徴的に表現（訳）汀の氷

②『河海抄』無し・『花鳥余情』無し・『日本古典文学大系』無し・玉上『評釈』（注）『細流抄』に「姫君の心のとけざるよりかく思へり」。肖柏本・三条西本・河内本・別本の保坂本は「みぎはの氷とけわたるにつけてもかうまでながらへけるも」へ汀の氷が一面解けてきたのを見ても、こんなに生きながらえたのも〉。湖月抄・岩波古典文学大系本も同じ。このほうが「ありがたくも」に続きやすいようだが、面白いのは底本などのほうである。（訳）汀の氷・『新潮日本古典集成』無し・『新日本古典文学大系』無し・『新編日本古典文学全集』（注）「ひめ君の心のとけざるより、かく思へり」（細流抄）（訳）水際の氷が一面にとけていく…。

③『河海抄』無し・『花鳥余情』雪の事也。山はかゞみをかくるといふ事あり。あまた所にあり・『日本古典文学大系』四方の山の姿を映している鏡と見られる汀の氷が・玉上『評釈』（注）無し（訳）汀の氷。（釈）この邸からは宇治川が見える。川水の氷に、四方の山がうつっている。月の光に輝いて・『新潮日本古典集成』まわりの山々が雪にきらめいて鏡と見まがう岸辺の氷が。「扇どものさまなどは、ただ雪深き山を月の明きに見わたしたるここちしつつ、きらきらと、そこはかと見わたされず、鏡をかけたるやうなり」（『紫式部日記』）・『新日本古典文学大系』周囲の雪の積った山々の姿が映って、鏡のように見える岸辺の氷が、月の光に映えて、の意味・『新編日本古典文学全集』（注）一面に雪の積った周囲の山の姿が凍りついた岸辺の水に映って冷たく月光にきらめく、凄涼の趣が深く、薫の孤独凄愴の胸中を象徴するものでもある（訳）四方の山を鏡のように映している岸辺の氷が、月の光に映えてまことに美しく見える。

④『河海抄』無し・『花鳥余情』無し・『日本古典文学大系』無し・玉上『評釈』（注）無し（訳）岸べの氷（釈）「みぎはの氷」は、巨椋池の岸か、山科川か。加茂川ではあるまい、と思う・『新潮

日本古典集成』水際の氷を踏み鳴らす馬の足音も。宇治の風物。（六巻橋姫二七三頁注九参照）・『新日本古典文学大系』無し・『新編日本古典文学全集』（注）無し（訳）水際の氷

⑤『河海抄』無し・『花鳥余情』無し・『日本古典文学大系』木幡あたりの峰の雪や、宇治の川辺の氷を踏み分けて、艱難苦労をしても、ここには道には迷わないで来るが、いかにも御身の故に、思慮分別には迷って盲目的になっている・玉上『評釈』（注）無し（訳）岸べの氷・『新潮日本古典集成』峰の雪や汀の氷を踏み分けて、難儀しながらやって来ましたが、それもあなたに迷うてのこと、道には迷いませんでした・『新日本古典文学大系』峰の雪や汀の氷を踏み分けて道は迷わずに来たのにあなたにすっかり迷ってしまった・『新編日本古典文学全集』（注）無し（訳）岸辺の氷

（二）京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店、一九六八）による。

（三）現在、山田法師の作品として、家集の他に、『後撰和歌集』に一首見られる。その他、『勅撰作者部類』、『和歌色葉』、および『十訓抄』で言及されているにすぎず、「茫然とした存在」と言える。（以上、久保田淳『西行・長明・兼好』（明治書院、一九七九）による。）

（四）寛弘三年（一〇〇六）、相模の母と関係を持つ源頼光は但馬守となり、彼女たちを伴って任地へ下るが、相模は寛弘六年（一〇〇九）に一足早く帰京したと推測されている。『相模集』の528番歌から592番歌までの六十五首は、592番歌の左注によれば「いはけなかりしうひこと」というまとまった歌群である。この歌群中、但馬の館の周辺と思しき自然描写があり、但馬にいる時期の作と考えられるものが見られる。（以上、『相模集全釈』（風間書房、二〇〇一）五〇・五〇四頁の解説による。）従って、この歌群に属する当該歌も寛弘六年（一〇〇九）以前の作と考えられる。

（五）『千穎集全釈』（風間書房、二〇〇七）の三六頁から三八頁まで、好忠歌との関わりが具体的な歌に沿って説明されている。安易な稀語表現の受容が目立ち、表層的な受容と評されている。

（六）『千穎集』当該歌の直後、次の歌が見られる。

あさせこぐをぶねならしもさはりおほみおもふ心をやるよしもなみ

（『千穎集』97雑十三首）

『千穎集全釈』の解説において、『好忠集』の409番歌が参考資料として挙げられており、両者の表現上の類似が認められる。

（七）『相模集』の100番歌の詞書を一部挙げる。

あやしきこと言ひ付けて、さるべき物どもなどしたためて、けざやかにほかへ往にけるのちに、うつろひたる菊さかりに見ゆるころ、むつまじきゆかりにて時々かよふ若き人の、ゆゑなからぬが立ち寄りて、「いかにまた、人はほかにか」と問ひしついでに、この花を目とどめて、ただには過ぎがたくやありけむ、…

この「若き人」は、『相模集全釈』の解説も踏まえて、経衡であると判断する。

（八）『源氏釈』をはじめ、『花鳥余情』や『細流抄』においては、「君こふる涙」の本文によって、引歌を指摘している。新潮日本古典集成や新編日本古典文学全集などは古注の指摘を踏まえているが、「君惜しむ涙」の本文を採っている。

（九）新編日本古典文学全集には「桂」の本文を有するものとして、

七冊が挙げられている。

［付記］

『源氏物語』と『紫式部日記』の本文は新編日本古典文学全集による。引用の末尾に『源氏物語』の場合は巻名と頁数を、『紫式部日記』の場合は頁数を記す。これ以外の引用本文は以下による。

・『山田法師集』『中務集』『後拾遺和歌集』…新編国歌大観（角川書店）

・『好忠集』…日本古典文学大系『平安鎌倉私家集』（岩波書店、一九六四）

・『大斎院前の御集』『相模集』『千穎集』『経衡集』…私家集全釈叢書（風間書房）

・『古今和歌集』『和漢朗詠集』『貫之集』…新潮日本古典集成（新潮社）

・『源氏釈』…源氏物語古注集成（おうふう、二〇〇〇）

・『河海抄』…玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八）

・『花鳥余情』『岷江入楚』…源氏物語古注釈叢刊（武蔵野書院）

・『源氏物語評釈』…玉上琢彌編『源氏物語評釈』（角川書店、一九六四）

（りん　きんえ・本学大学院文学研究科博士後期課程）